薔子からの手紙

辻　憲男（文学部教授）

井上靖は学生時代から詩を書いていた。「猟銃」という題の散文詩は、伊豆の山中で見かけた男の冷たい後ろ姿をモチーフにした。そして、その男をめぐる三人の女性の手紙を組み合わせて、同名の小説を書いた。

薔子（しょうこ）は母の秘密を知った。母一人娘一人の間にウソはない、と信じてきた。父とのつらい離別のわけを母は語らなかった。ところがその潔癖な母が、あの穣介との悲しい相愛を13年間も隠しつづけていたとは！　薔子は母の日記をぬすみ見た。母は「悪人」になるんだ、どうせなるなら「大悪人になりましょう」と書いていた。「罪、罪、罪」の文字の上に、「神さまお許し下さい。みどりさん許して下さい」と書いていた。薔子にもその予感はあった。女学生のころ、忘れ物を取りに芦屋川の家まで戻った朝、母が一人でいるはずの家になぜか入りにくかった。石をけりながらまた駅へ引き返した。みどりと母は仲の良いいとこどうし。薔子は幼いころからこのおばが大好きだった。おばも、その夫の穣介も、薔子をたいそう可愛がってくれた…。

井上靖は大阪毎日新聞社に勤め、阪神香枦園（こうろえん）に住んだ。戦後、懸賞小説に応募するため、阪急西宮球場で行われた「闘牛」に取材した短編を書いた。同じく「猟銃」は、ある女性の実話をもとに、阪神間の富裕層の孤独な悲劇を描いた。趣向が新しすぎたのか、二作とも賞金は得られなかった。

阪神電車香枦園近くの夙川堤。